

聖獣様に心臓（物理）と

身体を（性的に）狙われています。

### ラファード

フェルマ国を守護する聖獣。  
本来の姿は大きな虎。  
十年以上前に  
心臓を失くしており、  
そのせいで魔力が  
欠けてしまっている。

### ラヴィーナ

フェルマ国の王女。  
とても利発な少女で、  
兄のリクハルドに  
溺愛されている。

### リクハルド

フェルマ国の若き国王。  
ラファードとは幼馴染で  
親友のような間柄。  
隣のロウゼルド国との関係に  
頭を痛めている。

### 先代の聖獣

ラファードの父。  
引退してからは、  
妻と共に諸国を  
旅している。

### クレメンス

ロウゼルド国の王子。  
敵対するフェルマの城に  
特使としてやってくるが、  
その本当の目的とは——？

### アイラ

フェルマ国の城の女中。  
掃除の途中で  
エルフィールと出会い、  
親しくなった。

### エルフィール

辺境の伯爵令嬢。  
家の事情で商人の息子と  
婚約している。  
なぜか体内にラファードの  
心臓があり、そのせいで  
彼に身体を捧げることに。

## プロローグ 天獣

この世界でもっとも強い生き物は天獣だ。

獣の姿をしていながら高い知性を持ち、人の言葉を操り、人にはない強大な魔力を有する。寿命も長く、種族によって異なるが千年生きている天獣もいた。ただし、天獣自体の数は多くなく、それだけに世界にとって稀有な存在となっている。

ラファードはそんな天獣としてこの世に生を受けた。天獣の中でも虎の種族——天虎族と呼ばれる一族の出身で、誕生してたった十年しか経っていない幼獣だった。

けれど天獣は生まれつき知識があるので、自分が何であるかはもちろん、人間が聖獣と呼ぶ自身の父親がどういった存在であるかもよく知っていた。

ある日、父親は自らみずかが守護する土地の山にラファードを連れていき、こう言った。

「坊やは、人間が好きかい？」

「うん」

迷いなくラファードは答えた。特に父親が加護を与えている人間たちを気に入っていた。

「では僕の跡を継いで聖獣になるかい？」

聖獣。父親は人間にそう呼ばれていた。父親だけでなく、すでに亡くなっている祖父もまた聖獣だった。ラファードも、自分はきつといつか父親の跡を継いで聖獣になると思っていたので頷いた。「なる。俺、聖獣になりたい」

「代償として、この十年間の記憶の大半を失うとしても？」

「思いがけないことを言われてラファードは目を見張る。」

「聖獣になる時に、それまでであった記憶の大部分が消えてしまう。それでも聖獣になりたいかい？」

「記憶がなくなる……」

母親と暮らし、時々訪れる父と過ごす幸せな毎日。その記憶がすべて失われてしまう？  
ラファードは躊躇した。けれど、恐る恐る父親に尋ねる。

「でも、記憶がなくなるとも父上や母上を失うわけじゃないんでしょう？」

父親は一瞬だけ目を見張り、それから破顔した。

「もちろんだとも、坊や。君の記憶が失われても、僕らが君の父母であることには変わりない」

「なら、いい。それだけなら、新しい記憶をまた作っていける」

「そうだね」

しみじみと呟いて、父親は眼下を見おろす。そこには田畑が広がり、人間の営みが見えた。ラファードの父親が守っている風景だ。

「まだ幼い君にこの役目を負わせるのは酷だと思う。けれど、古きを捨てて新しい記憶を作ると口のできる君ならば、きつと僕とは違う関係を人間と築いていけるに違いない」

その言葉に何かを感じてラファードが見あげると、父親は目を細めて遠くを見つめていた。

「ラファード。僕が聖獣になったのは百歳の時だ。父が寿命を迎えようとする時になって、聖獣の役目を継いだ。継いだ時にそれまでの記憶の大半は失われてしまい、新しい記憶を作ろうにも父と母は間もなく亡くなり、それは叶わなかった。父母に対する思慕は残っているのに、彼らとの記憶がない。ぼつかり胸に穴が空いたようだったよ」

「父上……」

「そのせいで僕は臆病になり、加護する人間とも一定の距離を置いてきた。親しくなっても寿命の異なる人間は、あつという間に僕の傍からいなくなってしまうから。……でも妻と出会い、君という家族を得てから、思うところがあつてね。人間とも距離を置くだけでなく、もつと違う関係を築けたのではないかと考えるようになった。今さら僕がその距離を詰めるのは無理がある。でも君なら」  
父親はふと視線をラファードに移す。

「きつと僕より人間に寄り添った関係を築いていけると思う。だから僕は君に聖獣の役目を託したい。父と母が愛したこの国を、守ってやって欲しい」

ラファードは父親の大きな身体を見あげ、しつかりと頷いた。

「うん。守るよ。父上の守ってきたこの国を、人間たちを、俺が——」

誓うように告げるラファードを、父親は優しい眼差しで見おろしていた。

## 第一章 辺境の伯爵令嬢

フェルマ国の辺境の地にあるジュナン伯爵家の屋敷では、伯爵夫人の指示のもと、何人もの侍女が慌ただしく動き回っていた。

それもそのはず、伯爵家の長女エルフィールが社交界デビューのために、明日王都へ出発することになっているのだ。その準備に余念がない。

ところが肝心のエルフィールは、それに参加することなく自室で本を読んでいた。関心がないわけではなく、すでに必要な準備は終えているからだ。

しばらくの間は黙って本に目を落としていたエルフィールだったが、とうとう我慢できなくなつて顔をあげた。

——いくつ荷物を追加するつもりなのかしら……

ふうつとため息をつくくと、エルフィールは本を膝ひざに置く。そして、まだ袖そでを通していないドレスを長持ながもちに詰めるよう侍女に指示する母親に、呆れたように声をかけた。

「お母様、必要な荷物はもう王都に送つてあるし、そもそもそんなにドレスは必要ないわよ」

「いいえ。社交界デビューが済んだら、あちこちから夜会や舞踏会に誘われるようになるの。いつも同じドレスを着させるわけにはいかないわ」

母親である伯爵夫人は断固とした口調で言った。

「もちろん装飾品も同じものを使い回すなんてだめよ。いい物笑いの種になるわ。それなのにあなたつたら、必要最低限のものしか王都に送つてないそうじゃない」

「でもね、お母様。うちの交友関係が狭いことはお母様が一番分かっているでしょう？ 親戚付き合いもしていないから、夜会や舞踏会に招待されることはないわ」

エルフィールは悲しい現実を母親に示す。王都に屋敷を持つ親戚にはいるにはいるが、十年前、ジュナン伯爵家の経済状態が悪化した時に縁を切られて、交流を絶つたままだ。

「それは……」

「せいぜいブラーム伯爵のご友人が義理で誘ってくれる程度だと思おうの」

ブラーム伯爵というのは父親の数少ない友人の一人だ。王都に別宅を持たないジュナン伯爵家のために、屋敷の一つを貸してくれることになっている。その上、身体が弱くて長旅ができない母親の代理として、ブラーム伯爵夫人がエルフィールの支度を手伝うと言ってくれているのだ。

「お父様もあまり他の貴族とは交流がないんですもの。私が誘われることはないと思うわ。人目を引くほど美人というわけでもないし」

「そんなことはないわ、あなたはとても綺麗よ、エルフィール！」

すかさず母親は言ったが、それは親のひいき目というものだろう。

エルフィールは、自分が目の肥こえた貴族男性の気を引けるほどの容姿ではないことを知っている。整った顔立ちをしているものの、美人とまではいかない中途半端な娘。それがエルフィールだ。

高くもなければ低くもない鼻。シミ一つなく滑らかなだが、真つ白とは言い難い、よく言えば健康的な肌。形はいいが、色気をまったく感じさせない唇。

長いまつ毛は大きな緑色の目をことさら強調し、美人というより可愛らしい印象を人に与える。背中まで伸びたくせのある髪は豊かで艶やかだが、薄い茶色という平凡な色合いだ。

要するに人口の少ない田舎ではそこそこの容姿だが、煌びやかに装った貴族令嬢や貴婦人たちに紛れてしまえば、まったく目立つ要素のない容姿なのだ。

母親は、着飾ればエルフィールだって王都に住む貴族令嬢に負けないと思っっているようだが、自分を美しく見せることに長けた彼女たちに勝てるわけがない。

「ともかく、私の目的はあくまで王都の見学と、城にいらっしやる聖獣と王族の方々をこの目で見ることなんだから」

この国の貴族令嬢は、年に一度城で開かれる舞踏会に出席することで、社交界デビューを果たす。そのため、登城が許可される十六歳になると、みんなこぞってこの舞踏会に参加するのだ。

エルフィールも本来なら去年、王都に出て社交界デビューするはずだったが、当時はまだジュナン伯爵家の負債の返済が終わっておらず、貴重なお金を自分のことに充てる気にはなれなかった。そこで渋る両親を説得して、一年待つことにしたのだ。

社交界デビューが一年遅れることになったが、エルフィールは構わなかった。なぜなら――

「それに、私にはもう婚約者がいるのよ？ 他の貴族令嬢のように結婚相手を探しているわけではないのだし、夜会に行く必要も――」

母親の目が潤むのを見て、エルフィールは内心「しまった」と思った。母親にとってエルフィールの婚約は苦々しさと罪悪感を呼び起こさせることなのだ。

「ごめんなさい、エルフィール。本来なら社交界に出て身分の釣り合った相手と結ばれるはずだったのに、私たちのせいでは……」

「お母様、いつも言ってるでしょう？ 私は気にしないって。納得してこの婚約を受け入れているんだって」

「エルフィール……」

「それに、うちのような田舎貴族と縁続きになりたい貴族がいるかどうかも分からないじゃない。確かにサンド商会の息子さんは貴族じゃないけれど、女は望まれて結婚した方がきつと幸せになれると思う」

通常、伯爵令嬢ともなれば結婚する相手は貴族なのが普通だが、エルフィールは訳あって豪商の家に嫁ぐことが決まっている。それが母親には不本意なのだ。

「お母様、私は少しも苦じゃないわ」

穏やかな微笑を浮かべるエルフィール。母親は涙をぐつと堪えると、震えるような息を吐いた。

「せめて……王都にいる間だけでも、貴族の娘らしく華やかな場に参加して楽しんでほしいの。商人に嫁いだら、夜会や舞踏会に行ける機会はないに等しいもの。ね？ そのためにはいつ招かれてもいいように準備しておかないと！」

訴えるように言われて、エルフィールはやれやれと天井を仰いだ。

「……分かったわ。お母様に任せるわ」

とたんに母親は顔を輝かせて、侍女たちへの指示を再開する。

「そのドレスも荷物に入れてちょうだい。ああ、その首飾りもよ」

「はい。奥様」

忙しく立ち働く侍女たちを、諦め（あきら）の気持ちで見つめていたエルフィールは、深いため息と共にソファから立ち上がった。

「お母様、少し席を外しますね」

「図書室？ いいわ、いつてらっしゃい」

それにはにっこり笑って答えないまま、エルフィールは静かに自室を出る。

部屋を出たエルフィールが向かったのは、図書室ではなく玄関だった。母親に外出すると言わなかったのは、供をつけるとうるさく言われるからだ。

——お供なんて連れて行ったら、せつかく慣れてくれたあの子たちが出てきてくれないじゃないの。見知らぬ人間がいると、エルフィールの友人たちは姿を現してくれないのだ。

だからエルフィールは使用人たちが一番忙しい時間帯を見計らって、誰にも見とがめられないように屋敷を抜け出す。彼女が向かう先と目的を知っているのは、ほんの数人だけだ。

「姉上え！ 待って！ 湖に行くんですよう？」

玄関から外に出ようとしたエルフィールを甲高い声（かたかいこゑ）が呼び止める。来月十歳になる弟のプリンだ。「明日姉上は王都に行くから、きつと今日出かけると思っっていたんだ。僕も連れて行って！」

フリンはバタバタと走ってくるなりスカートに抱きつく。それを受け止めながらエルフィールはにっこり笑った。

「いいわよ、一緒に行きましょう」

彼女の行き先と目的を知っているうちの一人がフリンだ。遊び相手となる子どもが近くにいないこともあり、フリンは姉のエルフィールによく懐いている。エルフィールも歳が離れた弟をとてても可愛がっていた。二人は手をつないで玄関から外へ出ると、厩（うまや）に向かう。

「ジョナサン、馬を借りるわね」

エルフィールは小屋を覗き込み、ちょうど馬の世話をしていた馬丁（ばてい）のジョナサンに声をかける。すると、彼は振り返って皺（しわ）だらけの顔を綻（ほころ）ばせた。

「きつとお嬢様が来るだろうと思っって用意しておきましたよ」

「……そんなに分かりやすいのかしら、私ってば」

エルフィールが思わず苦笑すると、ジョナサンはさらに深い皺（しわ）を顔に刻んだ。

「お嬢様のことは生まれた時から知ってますからね」

馬丁（ばてい）のジョナサンは古くからジュナン伯爵家に仕えている古参の使用人だ。エルフィールが生まれた頃からの付き合いなので、彼女のやりそうなことはお見通しらしい。

ジョナサンもまたエルフィールの行き先を知っているうちの一人だった。

気性の穏やかな雌馬（めうま）に二人が乗るのを手伝いながら、ジョナサンはいつもと同じ忠告をする。

「いいですか、絶対に山には入らないくださいね。あそこは霧（きり）が深くて、もし迷ったりしたら探

し出すのが困難になりますから」

「分かっているって」

まったく同じ言葉を姉弟が同時に発する。それを聞いて、ジョナサンはくすくすと笑った。

やがて出発の準備が整うと、エルフィールは明るい声でジョナサンに告げた。

「では行ってくるわね、ジョナサン」

「行ってらっしゃい、お嬢様、若様。お気をつけて！」

ジョナサンの声を背に、エルフィールとフリンを乗せた馬は裏門に向けて歩き始める。

二人の姿が見えなくなるまで見送っていたジョナサンは、浮かべていた笑みをふっと消した。仲のよい姉弟が気兼ねなく外出できるのも、あと少しの間だけであることを思い出したからだ。

半年後、エルフィールが十八歳の誕生日を迎えれば、結婚してこの家を出ていくことが決まっている。屋敷に爽やかに吹き込んでいたエルフィールは、もうすぐいなくなってしまう。

「きつと、火が消えたようになるな……」

ジョナサンは寂しそうに呟くと、何かを振り切るように厩に戻っていった。

屋敷を離れたエルフィールとフリンは北に向かう道をのんびり進んだ。

ここから目的地まではそれほど遠くない。

ほどなく、なだらかな田園風景の先にいきなり山が現れた。それは奇妙な光景だった。遠くまで見渡せる平坦な土地に、ぽつかりと山がそびえ立っているのだから。

山はそれほど大きくなく、また高さもそれほどではない。隣国との国境に横たわる山脈に比べたら、山と呼べるかどうかもあるやしいほどだ。けれど皆がそれを「山」と呼ぶ。

大昔からジュナン伯爵領にあるその山は、時代によっては「聖なる山」とか「魔が住む山」とか呼ばれていた。うっそうと木々が生い茂り、迷いやすい上に、山頂は常に霧がかかっていて輪郭がはっきりしないからだ。

どんなに周辺が晴れていても発生するその霧は、山に近づく者の視界を奪う。そのため、領民は気味悪がって近づこうとしなかった。

その「魔が住む山」の麓にある小さな湖がエルフィールたちの目的地だ。

街道から山へと向かうあぜ道を進み、しばらくすると、エルフィールたちは目的地に到着した。少し離れた場所に馬を停め、二人は手をつなぎながら、日の光を反射してキラキラと輝く湖に向かう。山はうっそうと木が茂り全体的に薄暗いが、ここは違う。空には晴れ間がのぞき、周囲を明るく照らしていた。

ここを見つけたのは偶然だ。エルフィールが七歳の時、暗い屋敷の雰囲気に耐えられずに一人でふらっと出歩き、たどり着いたのがここだった。今となってはなぜあの当時、遠くからは不気味に見えていた山に近づこうと考えたのか、自分でもよく分からない。

でも今はその偶然に感謝していた。

なぜなら、ここでエルフィールは心を慰めてくれる大事な友人と出会ったのだ。

友人はいつの間にか姿を消していたけれど、また別の出会いをもたらしてくれた。だからこの場



所は、相変わらずエルフィールにとって大切な場所だった。

エルフィールとフリンは湖のほとりに立ち、山に向かって「ピュー」と口笛を吹いた。一度ではなく、何度も。

もしこの光景を母親が見たら「貴族令嬢が口笛なんて！」と卒倒するに違いないが、エルフィールはまったく気にしなかった。

しばらくすると山側の茂みの中からカサツと草を踏む音が聞こえた。次いで茂みからはいくつもの顔が覗き、エルフィールたちの姿を確認すると、わらわらと姿を現す。

茂みから出てきたのは猫だった。トラジマの猫を先頭に、黒やら白、茶色など、実に様々な色の猫たちが現れる。もちろん一匹ではなく、何匹もだ。そのうちの半数がまだ子猫と呼べる年齢だった。

「ニャア」

先頭のトラジマの猫がエルフィールの前に来て、挨拶するかのようには鳴いた。

「はぁーん、可愛い……！」

エルフィールは相手を崩して跪き、手を伸ばしてトラジマの頭を、そして喉を撫でる。猫はエルフィールの手の中で気持ちよさそうにゴロゴロと鳴いた。

「元氣そうね、ミーちゃん2号。ミャアちゃんも、ニャンちゃんも、ミーチビたちも」

一匹一匹を撫でながら挨拶すると、同じように猫を撫でていたフリンはなんとも言えない表情になった。

「いつも思うけど、姉上の名づけセンスって変……」

「え？ どこが変なの？ 猫らしくていいじゃない？」

本気で良い名前だと思っているエルフィールには、弟の言葉はとても心外だった。

「2号とか、普通つけないと思う……」

「だって、初代ミーちゃんは別にいるもの」

トラジマの毛並みを撫でながら、エルフィールは懐かしさに目を細める。

「ここを最初に見つけた時に出会った猫なの。この子のようにトラジマでね。すごく可愛かった。いつの間にかなくなっちゃったけど……」

いなくなったと分かった時は、本気で山に入って探そうと考えたものだ。けれどさすがに山に入る勇氣は出ないまま、ジュナン伯爵家の経済状態が好転したこともあって、屋敷を抜け出してくる頻度は減ってしまった。

それから五年後、なんとなく久しぶりに訪れた湖で出会ったのが、このトラジマ模様の「ミーちゃん2号」だ。

「ミーちゃんの子ともか孫なのかもしれないって思っ、根気よく餌付けしてようやく仲良くなったのよ」

ミーちゃん2号が他の猫との間にどんな子猫を生んでいき、今の状態になっている。ここにいるのは、みんなミーちゃん2号の子ともなのだ。

「さあ、みんな。お食べ」

エルフィールは台所からこっそり持ち出していたパンを小さくちぎって投げた。ちょうど目の前

にパン屑くずが落ちてきた白猫が、首を伸ばしてパンを口に入れる。

催促さいそくするように鳴く猫たちに、エルフィールとフリンはせっせとパン屑くずを与えた。夢中で食べる猫たちをエルフィールが笑顔で見つめていると、隣に腰を下ろしていたフリンがポツリと尋ねた。

「姉上……どうして結婚するの？」

「え？ どうしてって……」

「サンド商会から借りたお金は、去年全部返済し終わったって聞いたよ。だったら、姉上がお嫁に行く必要ないんじゃないの？」

エルフィールが驚いて弟を見つめると、同じ色の瞳が真剣な光をたたえて彼女を見あげていた。

「姉上が犠牲になることないんだ」

フリンは弱冠じやくかん九歳ながら賢く、時々びつくりするほど大人びている。貴族ではなく商人に嫁入りする理由をエルフィールの口から告げたことはないが、母親か父親か、もしくは使用人から聞いてほしいの事情は知っているようだ。

手を伸ばしてフリンの頭を撫でながら、エルフィールは穏やかな口調で答えた。

「あのね、フリン。私は犠牲になるつもりはないの。納得して嫁入りを受け入れているし、嫌だと思っていないもの。確かにサンド商会から受けた融資は利子もつけて返したわ。だからといって、私の嫁入り話が帳消しになるとは私もお父様も考えていないの」

母親は結婚話も無効になることを願っていたが、義理堅い父親は約束を破ることをよしとしなかった。それが融資を受ける条件だったからだ。もちろん、エルフィールも同じ考えだ。

「私はサンド商会にはとても感謝しているわ。親戚にも縁を切られてどん底にいたジュナン伯爵家に、ほぼ無担保で融資をしてくれたんですもの。あれがなければ我が家は今頃どうなっていたことか……」

十年前までジュナン伯爵家はそれなりに裕福な貴族だった。辺境にある領地は交通の要所ではないが、農業が盛んで収入も悪くない。その上、父親は規模は大きくないものの事業を手がけていて、会社もうまくいっていた。エルフィールも伯爵家の一人娘として贅沢ぜいたくを享受きやうじゆしており、それがこの先もずっと続くと思っていたのだ。

それが一転したのは、父親から事業の一部を預かっていた甥おひ——エルフィールにとっては従兄いとこが、悪徳商人に騙だまされ莫大ばくたいな借金を作ってしまったからだ。

彼に事業を任せていたとはいえ、会社は父親のものであったので、負債はすべてジュナン伯爵家が背負うことになってしまった。父親は抱えている事業をすべて売り払ったが、まったく足りなかった。領地や屋敷も抵当に入り、そのままでは先祖から受け継がれてきたものをすべて手放さなければならぬ状況じぶいに陥おちっていた。

すると、それまですり寄っていた親戚が、手のひらを返して絶縁状を突きつけてきた。使用人の半分もジュナン伯爵家を見捨てて逃げ出し、残ったのは古くから仕えてくれた使用人たちだけ。「お母様は心労で倒れてしまっし、お父様は金策きんさくに奔走ほんそうしていて、屋敷の中が暗くて重苦しくてね……とても酷ひどかったわ」

エルフィールの口元に苦い笑みが浮かぶ。七歳だったエルフィールは重苦しい雰囲気おんけいに耐えられ

ず、一人でふらつと外出した。そしてこの湖を見つけ、一匹の小さなトラジマの猫と出会ったのだ。

——だから苦い思い出ばかりじゃないのだけれど、かといって再び繰り返したいとは思わない。

幼いエルフィールにとって、あの日々はそれほど辛く重苦しいものだった。

「それを助けてくれたのが、サンド商会を立ち上げたリクリードさんよ。彼は屋敷にやってきて、無担保で融資をしてくれると言ってくれたのだ」

ただし、条件があった。それがリクリードの一人息子とエルフィールの結婚だ。女であるエルフィールにジュナン伯爵家を継ぐ資格はないが、彼女を娶（めと）ることで貴族と親戚関係になれるという思惑があったようだ。

父親は迷ったが、領民や残つてきている使用人たちのことを思ったら、その条件で融資を受けざるを得なかった。エルフィールも否（いな）やはなく、自分が嫁に行くことですべてが収まるなら安いものだとさえ思った。

けれど両親にとつては娘を売つたも同然のため、二人はエルフィールに深い罪悪感を抱いている。エルフィール本人はまるで気にしていないのに。

「私はね、フリン。あの時にサンド商会から受けたご恩を返したいの。一番大変な時に手を差し伸べてくれた人に報（むか）いたい。だからお母様が考えるほど、この結婚が嘆（なげ）かわしいものとは思っていないわ。それにね」

悪戯（いたづら）つぼく笑つてエルフィールは付け加えた。

「息子さんと会つたことはないけれど、父親のリクリードさんはとても美形なのよ。あの人の血を

継いでいる息子さんなら、絶対に不細工ではないはず。貴族だからって偉そうにふんぞり返つた、脂（あぶら）ぎつた男に嫁ぐよりマシじゃない？」

「そんな人、父上が姉上の相手に選ぶわけないよ」

不満そうに口を尖（とが）らせるフリンの頬を、エルフィールをつんと指でつついた。

「そうね。でもお父様でもどうにもならないこともあるのよ」

まだ子どもで他の貴族と接したことのないフリンには理解できないだろうが、父親だつて自分より上の身分である侯爵や公爵、あるいは王族にエルフィールを差し出せと言われたら、相手がどんな人間であれ逆（さか）らうことはできない。それが貴族社会だ。

いずれ父親の跡を継いでジュナン伯爵になるフリンは、否（いな）応（おう）なくその事実と向き合わなければならぬだろう。

——でも、まだ分からなくて当然ね。子どもだもの。お父様のもつてゆっくり覚えていけばいい。フリンはよい領主となるだろう。エルフィールはそんな予感がしている。だからこそ、この秘密の場所に連れてきて、猫たちに慣れさせているのだ。

エルフィールが家を離れていった後も、大切な場所と猫たちをフリンが守ってくれるだろう。

そのフリンがトラジマ模様の子猫——ミーちゃん3号を抱き上げながら、ふと思ひ出したように言った。

「そういえばデビュタントのための舞踏会では、聖獣様のお姿を見ることができんだよね」  
おそらくフリンが聖獣のことを思ひ出したのは、目の前の猫がトラジマだからだろう。

この国の聖獣は天虎族——つまり、虎だ。

聖獣と聞いてエルフィールの顔が笑み崩れた。

「そうなの。私のような田舎貴族が聖獣様を見られる唯一の機会なのよ」

王族は何か行事があるたびに国民の前に姿を現してくれるが、聖獣はそうではない。聖獣の姿が見られるのは、ほんの限られた機会しかないと言われている。

——デビュタントのための舞踏会が終わったら城に招かれることは二度とないでしょうから、これが聖獣の姿を見られる最初で最後の機会になるわ。

「いいなあ、姉上、直に見られるなんて！」

心底うらやましそうな目をしてフリンはエルフィールを見あげた。その気持ちはエルフィールにも痛いほど分かる。

この国の者にとつて聖獣は憧れであり、誰よりも敬うべき尊い存在だ。ともすれば王族よりも。伯爵以上の爵位を継ぐ時には、必ず国王に謁見しなければならぬ決まりがある。その謁見の時には聖獣も同席すると聞いている。

父親が伯爵位を継いだ時、謁見の間で見た先代聖獣の姿は、神々しく輝いていたという。今代の聖獣は代替わりして間もない若虎だというが、きつと先代に負けず劣らず立派な姿に違いない。

——ああ、早く見たい……！ きつとミーちゃんのような毛並みに違いないわ。

「なんで男には社交界デビュの催しがないんだろう？ 不公平だ！」

ふくれるフリンに、エルフィールは宥めるように言った。

「あなただつてお父様の跡を継いで伯爵になる時に、直に見られるじゃない」

「ちえっ、ずいぶん先の話だよね、それって」

「ぼやかないの。いつか必ず聖獣を傍で見られるんだから。それまではミーちゃん2号と3号の毛並みでも愛でていなさいな」

「……姉上、やっぱり名づけセンスが変」

フリンはトラジマのミーちゃん3号を目の前に持ち上げながら呼びかける。

「ね、お前もそう思うだろ？ タビー三世」

タビー三世というのはフリンがトラジマの子猫に「雄なのにミーちゃんはんはあんまりだ」と言つて勝手につけた名前である。

「何よタビーって。ミーちゃんの方が可愛いじゃないの！」

「僕がつけたタビーの方がカッコいいに決まってるー！」

言い合いを始める姉弟のセンスがどっちもどっちであることを、幸いなことに二人は知らない。

\* \* \*

フリンと山へ出かけてから十日後、エルフィールは王都にあるブラム伯爵家の別荘で、白いドレスを着付けてもらっていた。

今日はいよいよデビュタントのための舞踏会の日だ。

朝からブラム伯爵夫人が侍女を連れて別荘を訪れ、エルフィールの支度を手伝つてくれている。

「そのドレス、よく似合ってるわよ、エルフィール」

「ブラーム伯爵夫人、む、胸、こんなに開いていいんですか？」

大きく開いた胸もとを不安そうに見おろして、エルフィールはブラーム伯爵夫人に尋ねる。母親が王都のデザイナーに特注したというドレスは襟ぐりが深く、胸のふくらみが覗いてしまう際どいデザインだった。

「う、うちの母の時は首元まできっちり隠れるデザインだったって聞いたのですが……！」

「私の時もそうだったけれど、今の流行は襟ぐりの深いドレスなのよ。これでもきつとデビュタントのドレスの中では大人しめだと思わわ」

「これでも大人しめ、ですか？」

スースーする胸もとに不安しか感じないエルフィールだった。

けれど、田舎に引っ込んでいた自分より、王都の社交場でそれなりの人脈を築いているブラーム伯爵夫人の方が、よっぽど昨今の流行には詳しいはず。そう思い直して背筋を伸ばす。

「やっぱり首飾りはない方がいいわね。あなたの首筋はほっそりしていて形がいいから、首飾りをつけて隠したらもったいないもの。髪型も首のラインを邪魔しないものがいいわ」

ブラーム伯爵夫人は侍女にテキパキと指示し、それを受けて侍女がエルフィールの髪を結び上げる。鏡がないので今自分がどうなっているかまったく分からない状態だ。

最後に顔に化粧が施されると、ようやくブラーム伯爵夫人は満足そうに微笑んだ。

「素敵よ。どこから見ても完璧な淑女だわ、エルフィール」

姿見の前に連れてこられたエルフィールは、鏡に映った自分の姿にびっくりする。

やぼったい田舎娘の面影は消えて、白いドレスを身に纏う貴族然とした女性が映っていた。

ドレスは一見シンプルながらも贅沢にレースが使われ、腰から斜めに入ったドレープが美しいデザインに仕上がっていた。

肩からふわりと広がったパフスリーブは可愛らしい。一方で胸もとは大きく抉られ、深い襟ぐりから覗く豊かなふくらみは匂い立つような女性らしさに溢れている。ほっそりとした首筋を強調するように高く結い上げられた髪には、瞳の色に合わせた緑色の宝石がつけられていた。

「まあ……」

顔も、パツと人目を引く華やかな……とまではいかないものの、化粧のおかげか美人と言っても差し支えないものになっていた。

「ありがとうございます、ブラーム伯爵夫人！」

エルフィールが振り返ってお礼を言うと、ブラーム伯爵夫人はにっこりと励ますように笑った。

「とても綺麗よ、エルフィール。一世一代の晴れ舞台なのだから、胸を張っていきなさい」

「はい！」

玄関で待つ父親のもとへ向かうと、エルフィールの姿を見たジュナン伯爵は驚いたように目を見開き、それから相好を崩した。

「綺麗だよ、エルフィール。お母様そっくりだ」

愛妻家の父親らしい言葉だ。けれど、それはエルフィールにとっては最大の賛辞であるし、実際

のところエルフィールは母親によく似ている。

「お前をエスコートできることを誇りに思うよ」

「うふふ。今日一日よろしくお願ひしますね、お父様」

舞踏会の行われる大広間に入場する際、エスコートをするのは家族か親戚の男だけと決まっている。若い男性の方が見栄えがするので、兄か弟に頼むのが一般的だが、エルフィールの弟プリンはまだ子どもなので、エスコート役ができるのは父親しかいなかった。

もともとエルフィールの父親は背が高く、引き縮まった身体の持ち主で、堂々とした立ち姿は若い男にも引けを取らない。実際、城に入ってみれば、父親のさりげなくも堂に入った立居振舞いに、女官や他のデビュタントたちが感嘆していた。

——さすがお父様ね。

エスコートされているエルフィールより父親の方が目立っているのだが、彼女はまったく気にしなかった。

「王城は想像以上に大きいのね、お父様」

「そうだろう。城を取り囲む城壁の中に、まるまる一つの街があるようなものだからね。我々が今日立ち入るのは城のほんの一部分だ。私も過去に数回しか来たことがないから、案内役の侍従がいなければ迷うだろうな」

控え室で他のデビュタントたちが緊張しながら入場を待つ間、エルフィール親子はのんびりとそんな会話を交わしていた。

「入場して陛下の前に進み出た時、聖獣を一番近くで見られるのよね、お父様」

「ああ、陛下の座る玉座の後ろに台座がある。あの方はそこからじつと様子を見ているんだ」

「とうとうこの目で見られるのね」

話をしているうちに入場する時間になった。

家名を読み上げられたデビュタントたちが、控え室から次々と出ていく。そしてついにジュナン伯爵家の名前が読み上げられ、エルフィールは父親に手を預けて控え室を出た。

控え室と大広間は一本の廊下でまっすぐつながっている。父親にエスコートされて大きな扉の前に来ると、のんき者のエルフィールもさすがに緊張して手が震えた。

デビュタントの最大の試練が、これから行われる入場だ。大広間には主立った貴族の他、諸外国からの招待客がひしめいている。彼らに注目される中、玉座の前まで進んで国王に謁見するのだから、緊張するなという方が無理だろう。

大勢の中でのお披露目だ、家名に泥を塗らないためにも失敗は絶対に許されない。

扉の前で深呼吸を繰り返すエルフィールに、父親は微笑んだ。

「大丈夫、あれだけ練習したじゃないか。お前の作法は完璧だったし、たとえ失敗してもかまわないさ。我が家は社交界にめったに出入りしないから、多少物笑いの種にされようが何も問題ない」  
父親は事業で忙しく、あまり社交界に顔を出すことがなかった。身体が弱くて領地から出られない母親は言わずもがなで、ジュナン伯爵家の知名度はほとんどないに等しい。

おそらく大広間に集まっている貴族や招待客のほとんどが、ジュナン伯爵家の名を耳にしたことすらないだろう。だから恐れずに行けと父親は言いたいらしい。

「ありがとう、お父様」

少し気が楽になりエルフィールは微笑む。その時、扉の傍にいた侍従がリストを手に声をあげた。「ジュナン伯爵家ご長女、エルフィール嬢の入場です」

いよいよエルフィールたちの番だ。父親に預けている手にぐつと力が入る。

「行くぞ」

「はい」

父親にエスコートされ、大広間に向かつて一步踏み出す。

大広間はエルフィールの想像より大きくて、とても豪華だった。高い天井の一面には巨大な絵が描かれ、大きなシャンデリアがいくつも下げられている。

足元には赤い絨毯が敷かれ、それは扉から玉座までまっすぐ続いていた。その絨毯の両脇に大勢の貴族や招待客が並び、これから国王のもとへ向かうデビュタントを物見高く見守っている。先にお披露目を済ませたデビュタントたちも、エルフィールを値踏みするように見つめていた。

大観衆の中、エルフィールはゆっくりと進む。脚が震えているのが自分でもよく分かる。父親が上手に支えてくれていなかったら、脚がもつれていたかもしれない。

田舎でのんびり育ったこともあり、こういう大勢の人がいる場は苦手だ。

——一刻も早く終わらせたいわ。

そんな思いで自分の向かう先——つまり玉座に目を向けたエルフィールは、次の瞬間、すべてを忘れた。物見高い観衆も、女性に大人気だという若き国王も、何もかも目に入らなくなった。

エルフィールに見えているのは、国王の後ろに置かれた台座に悠然と寝そべる生き物だけ。

艶やかな黄色い毛並みに黒い縞模様を持った大きな虎が、クッションにもたれるように横たわり、顔だけあげて広間をじっと見つめている。

「……あれが……」

無意識に足を動かしながらエルフィールは息を呑んだ。

あの虎こそが聖獣——フェルマ国を守護する聖なる天獣。この世界でもっとも強くて、もっとも尊い存在だ。

——ああ、なんて美しくて神々しいの……！

この国に虎は生息していないが、三代にわたって国を守護してきた聖獣が天虎であるため、その下位動物である虎の姿は頻繁に絵に描かれ、あらゆるところでモチーフとして使われている。フェルマ国の民にとって虎は非常に身近なものなのだ。

エルフィールも例外ではなく、虎と聞けばすぐにその姿を思い浮かべることができる。だから、聖獣の姿を見ても驚くことはなく、尊敬と親しみを覚える程度に違いはないと考えていた。

けれど、予想とは違っていた。ちまたで見かける虎の絵と造形こそ同じだが、存在感や力強さがまるで違うのだ。

——ああ、城に来てよかった……！

目に焼き付けようと思い、夢中で見つめ続けていると、隣の父親が小さな声で呟いた。  
「エルフィール」

促すような声音に、エルフィールはハツとする。聖獣に見とれているうちに、いつの間にか玉座の前までたどり着いていたのだ。

——あ、そうだわ。淑女の礼……！

エルフィールは足に力を入れて深く膝を折り、作法通りに頭を下げた。聖獣に夢中になっていたのが功を奏したのか、緊張感がほどよく飛び、練習通りにすることができた。

「よく来てくれたね、ジュナン伯爵、それにジュナン伯爵令嬢」

頭上から若々しくも威厳に満ちた声が降ってくる。

二年前、前国王の病死に伴って即位した、リクハルド国王の声だ。聖獣に夢中になってしまったため、エルフィールは国王の顔をよく見ていなかったが、王太后によく似た美形だともつばらの評判だ。まだ独身の彼に、未婚の貴族令嬢たちが熱い視線を送っていると聞く。

「社交界デビューおめでとう。この先の君の人生が実り多きものであるように」

国王の言葉はデビュタントにかける常套句であり、それに対する受け答えもほぼ決まっている。

エルフィールは下を向いたまま口を開いた。

「もったいなきお言葉、ありがとうございます。国王陛下」

やりとりはこれだけだ。社交界デビューする令嬢の数が多いため、謁見する時間は最小限、それも決まった動作と言葉を交わすだけで終了となる。

父親と共に国王の前から下がりがりながら、エルフィールはホツと安堵の息をついた。

「よくやった、エルフィール」

「お父様のエスコートがよかったからよ」

一仕事終えて互いに微笑む親子は知らなかった。今までピクリとも動かなかった聖獣が頭を巡らし、その金色の目でエルフィールの背中を追っていたことを。

\* \* \*

すべてのデビュタントの謁見とお披露目が終わり、舞踏会が始まった。

白いドレスを着たデビュタントたちが、音楽に合わせて広間の中央で踊っている。今日、白を着ることが許されているのはデビュタントだけなので、すぐにそうと分かる。

エルフィールは父親と一度だけ踊り、ブラーム伯爵とも踊ったが、それ以降はダンスの申し込みを断っていた。

「踊ってくればいいのに」

父親は苦笑したが、エルフィールは首を横に振った。

「ダンスはそれほど得意じゃないからいいの。それよりお父様、私のことは気にせずお友だちと話をしてくれて」

会場には何人かの友人や仕事仲間も来ていたが、父親がエルフィールに遠慮して挨拶だけに止めているのを彼女は知っていた。



「いや、今日はエルフィールのエスコート役として来ているから……」

「遠慮しないで。久しぶりに顔を合わせた方もいるでしょう？ 私はずっとここにいますから」

なおも渋る父親を説得して送り出すと、エルフィールは周囲を見回して給仕の侍女に声をかけた。

「一杯くださる？ なるべくアルコールが強い方がいいのだけれど」

お仕着せを着た若い侍女はにこやかに微笑むと、お盆に載ったいくつかのグラスのうち、白ワインの入ったグラスをエルフィールに差し出した。

「それでしたら、こちらをどうぞ」

「ありがとう」

グラスを受け取ると、エルフィールはそれを持ったまま壁側に下がった。

お酒はあまり好きではないが、グラスを手にしていればダンスを断る言い訳になる。

今日の舞踏会には独身の貴族も多く招かれていて、彼らはよりよい家柄の娘を得ようとデビュータレントたちの品定めに余念がない。それでもエルフィールは伯爵令嬢というまざまずの身分なので、声をかけられることも多かった。

——私なんかを誘うなんて物好きね。社交界では無名に等しいのに。

美しく着飾った自分が男性の目を引くことには無頓着なエルフィールだった。

グラスを片手に大広間を見回す。玉座に国王はいたが、その後ろの台座に聖獣の姿はない。デビュータレントたちのお披露目が終わったと同時に姿を消してしまったのだ。

——舞踏会に聖獣は来ないのかしら？ もっと近くで見たいのに。

「そういえばお聞きになった？ 隣のロウゼルド国が最近やたらと魔術師を集めているという話よ」

「私も出入りの商人が主人にそんなことを言っていたのを耳にしたわ」

「まあ。あの国はまたよからぬことを考えているのかしら？」  
中年の貴婦人たちが集まってそんな会話をしている。興味を引かれたエルフィールはグラスを口につけて飲んでいるフリをしながら聞き耳を立てた。

ロウゼルドというのは東側の国境を挟んで隣り合っている国だ。ただし、歴史的にあまり仲はよろしくない。ロウゼルドはフェルマ国を侵略しようとは何度も戦いを仕掛けてきたのだ。五十年ほど前に休戦協定が結ばれたものの、国交は皆無に等しく、未だに緊張状態が続いている。

「まあ、我が国には聖獣がいるのだから、ロウゼルドがいくら魔術師を集めようが心配いらないわ」  
貴婦人の言葉にエルフィールは心の中で同意した。

聖獣の力は強大で、魔術師が束になっても敵わない。聖獣が守護する国が他国に侵略された例は有史以来一度もないのだ。

戦争になっても聖獣が敵を蹴散らし、国を守ってくれる。

——もっとも、その聖獣がもたらす豊かさこそ、ロウゼルドがフェルマ国を憎む原因なんですよけど。

フェルマ国とロウゼルド国。この二国は国土の広さがほぼ同じで、採れる資源もそう変わらない。けれど、国力や豊かさには大いに差があった。

聖獣のいるフェルマ国は気候風土が安定し、資源の供給も安定する。産業も活発になり、物資や

金が集まってくる。

一方、隣り合わせのロウゼルドは時折旱魃や洪水に見舞われる。政治情勢は安定せず、国力もあがらず貧しいままだ。持たざる国が持てる国を妬むのも無理はない。

ロウゼルドにも聖獣がいればいいのと思うが、こればかりはどうしようもないのだ。天獣が人間に関わることはめつたにないし、まして国を守護する契約を交わすことなどもつとまれだ。それだけに聖獣のいる国は希少で、周辺諸国の妬みを買うことも珍しくなかった。

幸い、フェルマ国はロウゼルド以外の周辺諸国とは友好関係を築いている。聖獣のいる国と敵対関係になるより、友好関係を築いた方が周辺諸国にとって得策だからだ。

——それだけに、いつまでもフェルマを妬み続けるロウゼルドは異質よね……

ワインのグラスをじっと見おろしながら、そんなことを考えていたエルフィールは、周囲が妙にざわついていることに気づいて顔をあげた。

周りの人々が視線を向けている方に目を転じたエルフィールは、そこに奇妙なものを見て、目を大きく見開いた。

まっすぐこちらに向かってくるのは、黒髪に浅黒い肌を持ち、異国の服装をした若い男だった。たくましい上半身には、黒地に刺繍が施されたベストのようなものを着ている。腰には白いサッシュが巻かれ、同じ色のゆつたりとしたスポンは足首できゅつと結ばれている。

——舞踏会に招かれた他国からの賓客かしら？

周囲の視線を余所に、迷いなく歩いてくるその男を見ながら、エルフィールはそんなことを思っ

た。なぜなら男の服装は他国のおとぎ話に出てくる服によく似ていたからだ。そのおとぎ話は、東方にある砂漠の国に伝わっている。

——きつとあの国から来たに違いないわ。ここは聖獣の国だけあって、あんな遠くの国とも交流があるのね。さすがだわ。

のんびりそんなことを考えていられたのは、男がエルフィールの方を見ていることに気づくまでだった。

「え……？ こつちに来るの？」

思わずきよるきよると辺りを見回し、男の目的が他の人物だという証を求めたが、それらしき者はいなかった。それどころか周囲の人々は、さっと彼女から離れてしまう。

「あわわわ」

うるたえながら顔を正面に戻したエルフィールは、男がもう目の前に来ていたことを知って目を剥いた。

——私？ やっぱり私なの？

「あ、あの……何か……？」

男は明るい金色の瞳でじつとエルフィールを見つめている。遠目には純粋な黒に見えた髪も、近くで見るとところどころ金が混じっていた。

一見、髪の毛を染めるのに失敗したようだが、なぜかそれが彼の容貌によく似合っている。

すつと通った鼻筋は高く、完璧に配置された目鼻立ちが彫像のようだ。目元は涼やかで、長いま

つ毛に縁ゆかりどられている。金色の瞳は色目の変わった光彩を帯びていて、とても神秘的だ。

——すごい美形だわ……。でもその美形が私になんの用かしら？

男に答える気配がなかったので、エルフィールはもう一度尋ねる。

「あの、私に、何かご用でしょうか……？」

じっとエルフィールを見つめたまま、男が口を開いた。けれどその口から出たのはエルフィールの質問への答えではなく、まるで予想もしない言葉だった。

「見つけた……俺のだ」

「は？」

口をポカンと開けるエルフィールに、男はつと手を伸ばす。その長い指が掴つかんだのは、あろうことかエルフィールの左胸のふくらみだった。

突然の不作法に周囲が息を呑む。一方、当のエルフィールは何が起こったのかよく分からず固まっていた。男の浅黒い手が、自分の胸を白いドレスごと鷲わしづかみ掴みしている光景は、彼女の理解をはるかに超えていたのだ。

固唾かたすを呑んで見守っている人々の前で、男はまた信じられない行動に出る。

さらにぐつと寄ってきたと思ったら、その顔をエルフィールの胸の谷間に突っ込んだのだ。

「……間違いない。俺の心臓だ」

男の吹きは周囲のざわめきに掻き消され、エルフィールの耳に届くことはなかった。……いや、エルフィールはそれどころではなかったのだ。

男が囁ささやいたことで胸の谷間に息がかかり、ぞわつと背筋に震えが走った。そのことでようやく正気ついたエルフィールは、悲鳴と共に男の頭を引きはがし、手にしていたグラスの中身を彼の顔にぶちまけた。

「何するの、この変態……！」

ざわざわと周囲のざわめきが大きくなった。

頭を振ってワインを払いながら、男がエルフィールを睨にらみつける。

「……それはこっちのセリフだ。なぜお前が俺の心臓を持っている……!？」

「は？ 心臓？ なんのこと？」

エルフィールは頭のおかしなことを言う男を睨にらみ返した。

——美形だろうが、賓客ひんきゃくだろうが、乙女の胸に顔を埋めるとは！ いったい、どうしてくれよう！

「お待ちください。お二人とも」

睨にらみ合う両者の間に割って入ったのは、侍従じじゆうの服を着た背の高い男性だった。

「国王陛下のご命令です。お二人とも、別室へいらしてください」

有無を言わせない口調に、エルフィールは口を引き結ぶ。変態男は不服そうに顔を顰しかめているが、侍従じじゆうの言うことを無視する気はないようだ。

人々の注目の中、侍従じじゆうの後について大広間を出ながら、エルフィールは頭の中で毒づいた。  
——まったく、とんだ社交界デビューだわ。

一方、たまたま近くにおいてエルフィールと男の会話を聞いていた者がいた。「心臓？ 心臓とはまさか……まさか……あれは……」

その者はエルフィールたちが大広間から出ていくのを呆然と眺めていたが、ハッと我に返り、さりげなくその場を離れた。このことを一刻も早く本国に伝えるために。

## 第二章 フェルマ国の聖獣

侍従が男とエルフィールを連れて行ったのは、大広間からほど近い控え室らしき部屋だった。

「ここでしばらくお待ちください」

男を警戒し、なるべく離れたところに立ちながらエルフィールは頷く。男はエルフィールに近づきはしなかったが、彼女を金色の目で追っていた。

——もう、いったいなんなのかしら？

彼を睨み返していると、扉が開かれて数人の男が颯爽と入ってきた。エルフィールはそのうちの一人を見て、ぎよつと目を剥く。

「待たせたね」

護衛の騎士を連れて、にこやかな笑みを浮かべながら入ってきたのは、なんとついさっきまで玉座に座っていた人物だった。王族特有の青い瞳と、柔らかかそうな金色の巻き毛をした青年——フ

エルマ国の若き国王、リクハルドである。

数年前、病気で亡くなった前国王の跡を継いで王位についた彼は、二十三歳という若さながら、なかなかのやり手だと聞く。即位した直後、童顔のせいか与しやすいと見た臣下や諸外国の使者が、彼に手ひどく遣り込められたという話だ。

「こ、国王陛下」

慌ててドレスのスカートを掴まんで頭を下げながら、エルフィールは混乱していた。

——まさか国王陛下が自らいらつしやるだなんて！

理解が追いつかないが、自分がとんでもないことをやらかしてしまったのは分かった。思えば国の賓客らしき男にワインをかけてしまったのだ。先に不作法な行為をしたのが男の方だとはいえ、エルフィールの行いは下手をすれば外交問題になりかねない。

——マズい……！

床を見おろしながらさあつと青ざめていると、柔らかな声がかかる。

「ジュナン伯爵令嬢、ここは非公式の場だからそんなにかしこまる必要はないよ。顔をあげて」

「は、はい」

恐る恐る顔をあげて国王を窺うと、穏やかな光を浮かべた目と視線がかち合う。その明るい青の瞳にも端正な顔にも非難の色は見当たらず、エルフィールはホッと安堵の息をついた。

——よかった。陛下はお怒りじゃない。

「君にもジュナン伯爵家にも悪いようにはしないから、安心するといい」

「は、はい。ありがとうございます」

リクハルドはエルフィールを安心させるためか、にこっと笑いかけた後、今度は男の方に視線を向けた。

「ラファード。そんな姿をしていったい何をやっているのさ、君は？」

その声は咎めるような響きを帯びていたものの、先ほどよりはるかに気安い口調だった。

「すぐに気づいて大広間から隔離したからいいものの、もう少しで大騒ぎになるところだったよ」  
そう言われた男は悪びれもせず肩を竦めた。

「大した騒ぎにはならないし、宴の余興だと思つて皆すぐに忘れるだろうさ。そのためにこの姿を取つただから」

「騒ぎにならなかつたのは、騒がれる前に対処したからだよ。……まったく早く気づいてよかつた」  
ふうつとリクハルドは深い息を吐く。

「そういえば、ずいぶん早い対応だったな」

「玉座から君の姿が見えていたからね！ まったく何をするのかと思えば、よりによつてあんな場所での女性の胸を掴むとか、胸に顔を押しつけるとか、いったい何を考えているんだ？」

呆れたようなリクハルドの言葉に、エルフィールは恥ずかしく思いつつも納得した。リクハルドは一部始終を見ていたからこそ、エルフィールに安心するように言つたのだろう。

「君が邪な感情を抱いて彼女に触れたわけじゃないのは分かつてるさ。けれど……」

「当たり前だ。俺は人間の娘に欲情したことはない。俺がこの娘に触つたのは確かめるためだ」

そこで金色の瞳が再びエルフィールを射抜く。

「この娘の心臓が、俺の心臓かどうかを——」

「なんだつて？」

心臓と聞いてリクハルドの目が大きく見開かれる。エルフィールは目を瞬かせた。

——心臓？ そういえばさつきもこの人、心臓がどうか言つていなかったかしら？

「触れて分かつた。間違いない。この娘の心臓は俺の心臓だ」

「まさか、そんなことが……」

リクハルドは絶句している。

「俺が間違うと思うか？」

「いや、君に限つてそれはないと思うけど……でも、まさか、そんなことが」

「あの……」

黙つて二人の会話を聞いていたエルフィールは、たまらず声をかけていた。自分より身分の高い人、それも国王の会話を中断させるのは、不作法どころか不遜な行為だと分かつていた。だが、自分のことを話題にしているらしいのに置き去りにされていることに危機感を覚えたのだ。

——訳が分からないのはこちらの方だわ！

「お話し中に申し訳ありません。ですが、私にも分かるように説明していただけますでしょうか？  
まず最初に……」

エルフィールは視線を男に向ける。

「このお方は、どういった方なのでしょう？」

「それは……」

リクハルドが判断を求めるように男を見る。男はむすつと口を引き結んだが、微かに頷いた。それを見ていたエルフィールは、あることに気づいて内心怪訝に思う。

男とリクハルドは気安く話しているものの、どちらかと言うと男の方が上の立場であるようだ。

もし男が他国の王族なら、リクハルドが気を使うのも分かる。だが、それでも対等な立場で、どちらが上とか下とか感じることはないはずだ。それなのに、なぜか二人を見ていると、一国の王であるリクハルドが男を敬っているのが感じ取れる。

聖獣の守護する国の王がそれほど敬う相手とは——？

嫌な予感がエルフィールの胸にじわじわと湧き上がった。

「そうだね。王族や重臣の中でも一部の者しか知らないことだけれど、君の心臓が彼女の中にあるというのであれば、彼女は知っておくべきだろうね」

リクハルドは男に重々しく頷き返すと、エルフィールを見る。とたんに防衛本能が働き、彼女は思わず口にしていた。

「あ、やっぱり知らなくていいです」

だが、言うのが遅かったようだ。リクハルドはエルフィールを見据えながら告げる。

「今は人間の姿を取っているけれど、彼は……彼こそがこの国を守護する聖獣——天虎族のラフアードだ」

その言葉がエルフィールの頭の中に浸透するのに、時間がかかった。たつぷり十秒以上かかったのち、エルフィールは口をぽかんと開ける。

「——は？ 聖獣？」

「そうだ。聖獣だ」

それからさらに十秒後、幻想を粉々にされたエルフィールの悲痛な叫びが響き渡った。

「そんな、嘘よっ！ 聖獣がこんな変態だなんて……！」

天の遣いと呼ばれ、人間にとっては神にも等しい天獣族だが、彼らはほとんど人前に姿を現すことがなく、関わりようもしない。ところが、まれに人や国を気に入って特別な加護を与えることがある。豊かな実りと平和をもたらしてくれる彼らを人々は「聖獣」と呼び、敬っていた。

ただし、聖獣の数は極端に少ない。天獣族が加護を与えることはめったになく、その加護も一代限りで終わることが多い。聖獣の寿命が尽きる前に怒りを買ひ、加護を失った国もあると聞く。

そんな中、フェルマ国は聖獣が三代にわたって加護を続けている稀有な国なのだ。そのため、聖獣の加護を持つ国々の中心であり指導的立場となっている。フェルマ国の聖獣は聖獣の中の聖獣と呼ばれ、もつとも尊い存在である——とエルフィールは父親から何度も何度も聞かされて育った。

「それなのに、聖獣の中の聖獣が変態だなんて……！ 聖獣というのは穏やかで慈悲深くて立居振舞いも立派で品があるものと思っていたのに……」

ショックのあまり思ったことをすべて口にしてしていることに、エルフィールは気づいていない。

「そのイメージはおそらく先代の聖獣のことだと思うよ」

リクハルドと侍従は思わず苦笑を浮かべる。変態呼ばわりされた男——たった今この国の聖獣だと判明したばかりの存在は、ムツとして顔を顰めていた。

「悪かったな。父上のように立派じゃなくて」

機嫌の悪そうな声が聞こえ、エルフィールは自分が本音を垂れ流しにしていることによく気づいて口に手を当てた。

「も、申し訳ありません……」

「まあ、まあ。未熟なのは僕も同じだし、拗ねる前に先代よりも立派だと言われるように頑張ろうよ」取り成すように言うリクハルドに、エルフィールは感謝の視線を送った。

フェルマ国の聖獣は十年ほど前、それまで三百年にわたってこの国を加護してきた先代から、その子どもへと代替わりしている。今の聖獣は三代目で、長い寿命を持つ天獣としてはまだまだ若いですが、とても強力な魔力を持っていると聞く。

今は人間の姿をしている聖獣を、エルフィールは改めて見つめた。

「聖獣は、人の姿にもなれるのですね……」

「獣の方が本来の姿だけだね。魔力を持っているから姿はいくらでも変えられるんだよ」むすつとしたままの聖獣に代わって答えたのはリクハルドだった。

「そうなんですか」

人間離れた美貌も、異国風の変わった姿も、聖獣と言われれば納得できる。……胸を掴まれて

谷間に顔を突っ込まれたのは解せないが。

「そんなことよりも心臓だ。おい娘、なぜお前が俺の心臓を持っている？」

聖獣が金色の目でエルフィールを睨みつける。エルフィールは思わず眉を寄せた。

「あの……先ほどからずっと心臓心臓と仰っていますか、なんのことですか？」

口を開いたのは、やはりリクハルドだった。

「事情を知らない君には訳が分からないよね。僕から説明しよう。その代わり、このことは絶対に他言しないでくれ。国の重要機密なのだから」

そう前置きしてから、リクハルドはすうつと息を吸って告げた。

「実はね、ラファード……今代の聖獣は心臓が欠けているんだよ」

聖獣——ラファードが自分の心臓がないことに気づいたのは、ほんの数年前だという。

「天獣は獣の姿を取っているけれど、それは魔力で地上の獣を模しているだけで、実際に肉体の機能が必要なわけじゃないんだ。血も出るし内臓もあるけれど、それが欠損したとしても生きていくには支障がない。だからラファードも自分の心臓が欠けていることに気づかなかった」

「それまでまったく気づかなかったんですか？」

エルフィールが思わず尋ねると、ラファードがムツとして答える。

「……魔力の一部が欠けているような気はしていた。ただ、それは聖獣の役目を父上から引き継ぐ時に行った継承の儀の影響だと思っていたし、生きていくために心臓が必要なわけではない。だから

らなかなか気づけなかった」

気づいたのは、国王の妹であるラヴィーナ王女がラファードに抱っこをして欲しいとねだったのがきっかけだったという。

「まだ幼いラヴィーナの要請に応じて、ラファードは人間の姿になって抱き上げた。その時ラヴィーナが、彼から心臓の音がしないことに気づいたんだよ」

『ラファ兄様、どうしてお胸の音が聞こえないの？ リーおじ様のお胸からは音が聞こえるのに』

子どもらしい無邪気な言葉が、今までラファード自身がまったく気づいていなかった衝撃の事実を明らかにした。ラヴィーナ王女の言う『リーおじ様』というのは先代の聖獣のことだ。先代の聖獣からは心臓の音が聞こえるのに、ラファードからは聞こえない。この事実が一番驚いたのはラファード本人だった。彼はそれまで心臓の音が聞こえるのが当たり前だと知らなかったのだ。

心臓がないということは血が巡っていないことになるが、天獣が傷ついて血を流すことは一生に一度あるかないかのことなので、気づく機会もなかった。

人間には心臓が不可欠だということは知識として知っていたものの、彼以外の天獣にはちゃんと心臓があることも、その心臓が生きて脈打っていることも、ラファードは知らなかったのだ。

「生まれつきなかったわけじゃない。そもそも天獣の肉体が欠損して生まれることは有り得ない。つまりラファードは誕生した時は心臓があったのに、今まで生きてきたうちのどこかの時点で失っ

ているんだ。たぶん、聖獣になる前……継承の儀式で記憶が飛ぶ前に」

「継承の儀式？」

先ほども聞いた言葉にエルフィールは首を傾げる。

「ああ。国と聖獣が交わした加護の契約を継承させる儀式だ。これはもともと別の個体、つまりラファードのお祖父さんじいさんに当たる先時代の聖獣が国と交わした契約だね。それを継承させるのはかなり負担がかかることらしく、代償としてそれまでの記憶が飛ぶらしい。だからラファードは生まれてから聖獣になるまでの間の記憶がほとんどないんだ」

「それまでの記憶が……ない？」

エルフィールは目を見開く。記憶や思い出のすべてを失ってしまうのは大変なことだ。そんな思いままでして、彼らはこの国のために聖獣の役目を継承し続けてくれている。

「聖獣になってからの十年は彼もちゃんと覚えている。もちろん僕もね。その間に心臓が欠けるような出来事はなかったと断言できるよ。だから、もしそんな出来事があったとしたら、それは聖獣の役目を継承する前だと思う。ラファードは何も覚えてなくて、手がかりがなかった。でも……」  
リクハルドの視線がエルフィールの左胸に注がれる。そこに性的な意味はなかったものの、嫌な予感を覚えてエルフィールはとっさに手で胸を隠した。

さつき聖獣はなんと言った？ 『あの娘の心臓は俺の心臓』？

——いやいや、まさかまさか！

エルフィールの心臓はエルフィールのものだ。運動すればどくどくと脈打つし、緊張したり興奮



したりすればドキドキと高鳴る。今だって、耳の奥でバクバクとうるさいくらいに鳴っている。これが他人の心臓であるわけがない。

「な、何かの間違いです！ これは私の心臓ですから！」  
ラファードがスツと目を細める。

「俺が自分の心臓を間違えるわけないだろう？」

「心臓がないことに数年前まで気づかなかつたんじゃありませんか！」  
「ぐっ……」

どうやら痛いところを突かれたらしい。ラファードは顔を顰めると、ずんずんと歩いてきてエルフィールの前に立った。

「そんなことはどうでもいい。問題なのは、お前の胸にあるのが俺の心臓だということだ。娘、どうやって俺の心臓を手に入れた？ 覚えていることを話せ」

「だから、これは私のしんぞ——」

「言え」

短く命令されると同時に、目の前の姿がいきなりぶれた。つい今しがたまでくつきりとしていた輪郭が揺らぎ、たちまち薄くなっていく。やがて、人の形の残像が消え、目の前にいたのは大きな虎だった。間違いない。調見の間で見たあの虎だ。

本人の言う通り、そしてリクハルドの言う通り、彼は聖獣だったのだ。

虎は息を呑むエルフィールを、その金色の目でじっと見据えている。そして静かな、けれど逆ら

えない響きのある声で命じた。

「言え。どうやって俺の心臓を手に入れた？」

逃げたいのに、まるで床に縫いとめられたかのように足が動かなかった。

——そんなこと言われても、知らないものは知らないのに……！

抗議はしたが、喉からはヒューツという空気の音しか出てこなかった。

——なんて大きくて、恐ろしくて、そして綺麗な虎なんだろう。

ぬっと伸ばされ、エルフィールを真正面から見つめている顔は大きい。口を開けばエルフィールの顔などがぶりとひと呑みできそうだ。前脚は太く、鋭い爪が覗いている。エルフィールの命など一撃で奪ってしまうだろう。

この瞬間、エルフィールの命はまさしくラファードの手の中にあつた。

……怖い。けれど、なぜかエルフィールは目の前の虎に魅入られていた。

やがてラファードやリクハルドたちにしてみたら、ほんの少しの——でもエルフィールにとつては永遠とも思えるような時間が過ぎ、彼女の身体にかかっていた見えない圧力がふつと消えた。

急に脚の力が抜け、エルフィールはがくりと床に座り込んだ。なぜか全身がぶるぶる震え、心臓が痛いほど脈打っている。

「ふん。どうやら知らないというのは本当らしい」

ラファードは人間の姿になると、床に座り込んで震えているエルフィールから顔を背けた。

「心臓を失った原因や、この娘に渡った理由が分かると思ったんだが……」

「結局分からなかったのかい？」

リクハルドがのんびりした口調で尋ねる。ラファードはつまらなそうに頷いた。

「この娘は何も知らないし、覚えてもないらしい」

「父親のジュナン伯爵は何か知っているかな？」

「知っていればいいが、望みは薄いだろう。謁見の間で見た時も、彼からは何も感じなかった。娘の心臓が俺のものだと知っていたなら、あれほど平静でいられるわけがないからな」

やれやれとため息をつき、ラファードはソファまで歩くと、ドカッと腰を下ろした。

「心臓が見つかった方がいいが、肝心なことは分からずじまいだ」

「心臓は取り戻せそうかい？」

その質問に、ラファードはちらりとエルフィールに視線を向けて、それから首を横に振った。

「いや。無理だ。さつき触って分かった。俺の心臓とその娘の心臓は同化している。もともとは俺の魔力なので取り出すことは不可能ではないが、それをやるとその娘が死ぬ」

「それは……困ったね」

リクハルドは深いため息をついた。エルフィールは二人の会話を聞いて、呆然とする。

「……死ぬ……」

——本当にこの心臓は聖獣のものなの？　そして取り出されると……私は死ぬの？

お腹の奥がすうっと冷たくなり、顔から血の気が引いていく。

信じたくない。自分をからかっているだけだと思いたい。けれど、聖獣とこの国の王がエルフィー

ル相手に冗談を言う必要はない。つまり、彼らは真実を言っているのだ。

——私の心臓が、聖獣の……

ぎゅっと手のひらを胸に押し当てると、いつもより速く鼓動を刻む音が聞こえた。

「どうするんだい、ラファード？」

俯くエルフィールをちらりと見ながらリクハルドが尋ねる。

「どうするもこうするも、一つしかない。こうしている間にも、俺の魔力はその娘を生かすために費やされている。微々たるものだが、今は少しでも魔力が惜しいんだ」

「彼女の寿命が尽きるまで待つてあげられないのかい？　人間にとつての一生は、長寿の君にとつてそれほど長い時間じゃないはずだ」

「平素ならそれでもいいんだが、お前も知っている通り、隣のロウゼルドの動きが怪しい。魔術師を集めているという話だし、もしかしたら百年ぶりに戦争になるかもしれない。その時に魔力が万全でなければ困るんだ」

「どれほど大勢の魔術師を集めようと、天獣に勝てるわけではないと思うんだけど……」

「だが、油断はできない。俺は百戦錬磨の父上と違って、戦った経験があるわけじゃないからな」

二人の会話を聞きながら、エルフィールはのろのろと顔をあげた。全部が理解できたわけではないが、ラファードがエルフィールから心臓を取り戻したい理由がおぼろげながら分かるような気がした。

この国のためにだ。……なぜなら彼は聖獣だから。ただの変態ではないからだ。

エルフィールはドレスの胸もとをきゅつと握る。

この国の貴族の一人として、命を捨ててでも心臓を返すべきなのだろう。それが義務であり道理だ。でも……でも……

父親や母親、そして弟の顔が脳裏に浮かぶ。そのとたん、ぶわつと目に涙が浮かんた。

どんなに利己的だと言われようが、非国民だと責められようが、エルフィールはまだ死にたくなかつた。

——だって、私はまだ親孝行していないし、小さな弟にも何もしてあげていない……！

辛い時に支えてくれた使用人たちにも、どんなに感謝しているか言っていない。助けてくれたりクリードさんやサンド商会にも何も報いていない。

——まだまだみんなの傍にいたい。まだ、死にたくない……！

ぼろぼろと目から涙が零れ落ちていく。

チツという舌打ちの音が聞こえたのは、その時だった。

「ああ、もう。泣くな」

驚いて顔をあげると、目の前にいつの間にかラファードが跪いていた。ラファードはエルフィールの頬を指でぐいっと拭う。そのしぐさは少し乱暴だったにもかかわらず、なぜかエルフィールは優しく感じられた。

「別にお前の命を奪おうと思ってはいない。怖がらせて悪かった」

「で、でも、私の心臓が必要なのでしょう……？」

「それは最後の最後、どうしようもなくなった時の手段だ。守護するべき民の命をいたずらに奪うつもりはないし、そうならないように努力する。だから泣くな」

泣くなど優しく言われると、さらに涙が出てきてしまうのはどうしてなのか。

目じりに溜まった新たな涙を、浅黒くて温かな指が拭っていく。

「だから泣くなというのに。心配はいらない。お前の命を奪わないで済むような方法を考えよう」

「どうやって？」

そう尋ねたのはリクハルドだった。ラファードがエルフィールの涙を見てうるたえている図が面白いのか、愉快そうな表情をしている。ラファードはチツと舌打ちした。

——聖獣が舌打ちって……

エルフィールの抱いている幻想をとことんぶち壊してくれる人だ。……いや、人ではないけれど。調子が戻ってきたのか、瞬きして涙を振り払いながら、そんなことを考えているエルフィールだった。

「父上なら、この娘を死なせずに心臓を取り戻す方法を知っているかもしれないだろう」

ラファードは立ち上がりながらリクハルドに言った。

「そうだね。先代の聖獣ならご存知かもしれないね。あの人は博識だから。ただ、フェルマに戻ってくるのは来年とか言っていないかった？」

「ああ、だがそんなに待ってられない」

獣としての習性か、ラファードは指に付いていたエルフィールの涙をペロリと舐め取る。地面に

座り込んだままのエルフィールは見えていなかったが、ラファードは何かに気づいたように目を見開き、一瞬だけ動きを止めた。

「ラファード？」

彼の様子に気づいたリクハルドが眉を顰める。

「あ、ああ。なんでもない。リクハルド。すぐに父上を探して戻ってくるように伝えてくれ」  
気を取り直したように指示すると、ラファードはエルフィールを見おろした。

「娘、お前の名前は？」

エルフィールは目を丸くしながら答える。

「え？ えっと、エルフィールと申します。エルフィール・ジュナンです」

「エルフィールか。ではエルフィール」

ラファードはエルフィールの腕を取って立たせながら、尊大に命じた。

「お前の身柄は今この瞬間から俺が引き受ける。俺の名を呼ぶことも、傍に仕えることも許そう」

「え？」

嘩然とするエルフィールを見おろし、ラファードはにやりと笑った。

「見つけたからには、俺の許可なくこの城から出られると思うなよ、我が心臓よ」

バタバタと複数の足音が近づいてきているのを耳にしながら、エルフィールはポカンと口を開けたのだった。

\* \* \*

「とんだ一日だったわ……」

用意してもらった部屋のベッドに横たわりながらエルフィールはぼやく。

ラファードの宣言通り、エルフィールは城から出ることを許されず、ひとまず居残ることになった。あの後、駆けつけてきた父親は仰天したものの、国王と聖獣に言われれば断れるはずもなく、娘をひどく心配しながらも屋敷に戻っていった。

もちろんジュナン伯爵もエルフィールの心臓が聖獣のものとはまったく知らなかったので、なぜこのような事態になったのかは分からずじまいだ。

「私、どうなるのかな……いつになったら帰れるのかしら？」

当然、心臓のことが解決したらだ。発した疑問に自分で答えを出すと、エルフィールはどつと疲労感を覚えた。

今日は舞踏会の準備で朝から忙しかった。体力的には大したことがなくても、慣れない場所でもでもない事実が発覚し、さすがのエルフィールも疲れ果ててしまった。

——もう休もう。眠れるかどうか分からないけれど。

そんなことを思いながら目を閉じたエルフィールだったが、自分で思っていた以上に疲れていたらしく、五分後には静かな寝息を立てていた。

それからしばらくして、一人の男性が音もなく姿を現す。人の姿となったラファードだ。